

# 埋葬

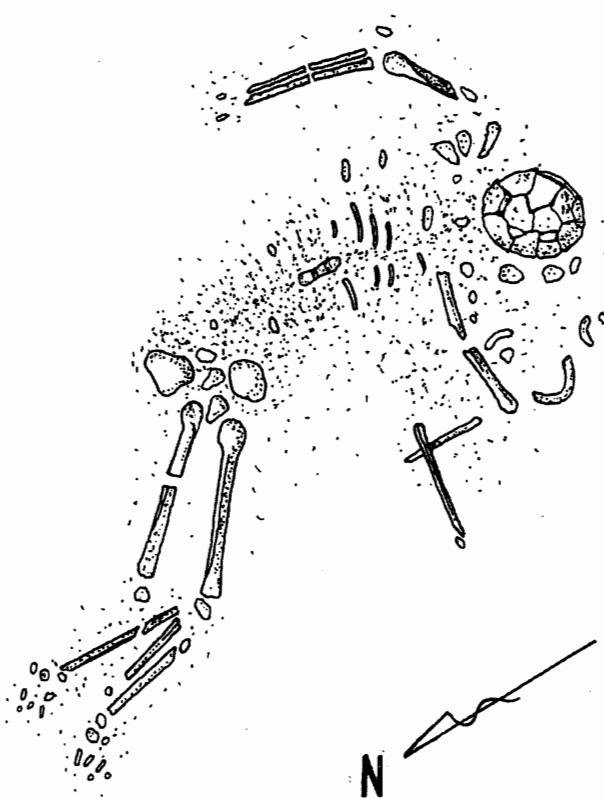
岡本勇

遺骸を葬る場合には、さまざまな方法があるだろう。しかし、いまわれわれが縄文時代のそれについて認識することができるのは、なんらかの方法において地中に埋められたもの、すなわち「埋葬」だけである。縄文式土器、およびそれとともに使用された各種の労働用具などが、時期と地域によって必ずしも同一でないよう、埋葬のあり方もまた、それとひとしくなんらかの相違をもっているであろう。しかし埋葬例は、まだ土器型式によって細分される各時期からみれば、偏在と著しいほどの不足を示しているし、またそのことは地域についても同様である。したがって土器型式の編年の時期に相応して埋葬のあり方を具体的にあとづけようとする考古学にとっての現段階的な試みは、ここではいちおう断念しなければならないであろう。

埋葬のあり方が考古学の問題として意識的にとりあげられたのは、大正年代の中頃以後であった。しかし、その方向はほとんどの場合、解剖学者によって人骨採集とともに進められたので、埋葬のあり方はそれに付随して、あるいはその結果として明らかにされるにすぎなかった。もちろん、そのことは当時の学問の状況からみてやむをえないことであった。だが、やがて縄文文化の研究が土器型式の編年的研究をとおして、一つの体系を確立しはじめていったとき、多くの人骨の発掘はその考古学の成果をふまえて、その上にたつ問題意識を深めることに、必ずしも充分であったとはいえない。埋葬の研究は、そこに大きな盲点を残さざるをえなかった。

埋葬のあり方がまず問題とされるためには、どのような形にせよ直接その遺骸の存在を必要とするであろう。埋葬された遺骸は、貝塚その他のごく限られた条件の場所で、人骨という形において見出されるのが最も一般的な場合である。これらの人骨は、相応に掘られた穴のなかに手足を折りまげた窮屈な姿勢（屈葬）で葬られるのが普通であるが、なかには手足をのばして寝た姿勢（伸葬）のものもある。

さかのぼりうる最古の埋葬例は、神奈川県平坂貝塚で発掘された早期初頭のひとつの人骨である<sup>(1)</sup>が、それはいわゆる伸葬とも屈葬ともいえない、あたかもたれ死にしたかのような姿勢で貝層下のローム面に横たえられていた。埋葬するために充分な穴が掘られたとはみられず、せいぜい土が薄くかけられたといった感じであった。（このみじめな埋葬のあり方は、その遺骸が生前いくたびかのはげしい飢餓を経験したという、きびしい生活の諸条件と関連して問題とされるべきである）このような特殊な例を除けば、縄文時代の意識的に埋葬された人骨のほとんどすべては、屈葬または伸葬の姿勢で葬られていた。宮城県舟入島貝塚の貝層下から発見された人骨は、早期の終末に属するものであるが、これは上向き（仰臥）の屈葬の姿勢を示していたといわれる<sup>(2)</sup>。縄文時代の前期の埋葬例は、かなり多く知られている。とくに、



第1図 神奈川県平坂貝塚で発見された人骨

この時期における西日本のいくつかの場所からは、人骨が群集して発見された。大阪府国府遺跡・岡山県太田貝塚・熊本県轟貝塚からは数10体におよぶ夥しく多くの人骨が発見されているが、そのうちの大部分は前期に属するものとみてよいだろう。しかし、これらの各遺跡における遺骸の埋葬姿勢は必ずしも同一ではない。国府遺跡では屈葬がすべてであるのにたいし、太田貝塚では伸葬が圧倒的に多く、また轟貝塚では屈葬以外見出せなかつた<sup>(3)</sup>。東北地方の二、三の例は、この時期に屈葬の行われたことを示しており、またそれは中期以後晩期にいたるまでの多数の埋葬例につ

いても変化なくみとめらる埋葬姿勢であった。関東地方の中期には、伸葬による埋葬の存在したことを、僅かではあるけれど茨城県陸平貝塚で発見された人骨<sup>(4)</sup>によって知ることができる。しかし中期末に位置づけられる若干の埋葬人骨には、伸葬とともに屈葬の姿勢のものも発見されているし、またそれはひろく後期にもおよんでいる。ひきつづき、後期においてはそのはじめから屈葬とならんで伸葬もより多くみとめられ、関東の狭い地域のなかで土器型式によって細分される時期に、二つの葬法が対蹠的に存在したことを示している。関東以西の後期およびそれにつづく時期に属する埋葬例は、ほとんど屈葬であった。それは、愛知県吉胡貝塚や岡山県津雲貝塚で発見された驚くほど多くの人骨をひきあいにだすことによって、いっそう明らかである。吉胡貝塚出土の人骨総数307体のうち、埋葬姿勢のはっきりしているものは161例であるがこのなかの13例を除き、すべては屈葬であった。また同じく津雲貝塚においては、57例のうち2例だけが伸葬であったといわれる。人骨の発見に乏しい四国でも愛媛県平城貝塚において「豎穴様」の埋葬穴から、「屈葬して居たものではないかと思われる」状態で3体の人骨の発見がつたえられている<sup>(5)</sup>。屈葬が支配的であったことは確かであろうが、しかしそれは晩期の終りまでは一貫して存続しなかった。愛知県五貫森貝塚は晩期の終末に位置づけられる

ものであるが、その小さな貝塚から発見された2体の人骨は、伸葬の姿勢で埋葬されていた<sup>(6)</sup>。また、1951年の吉胡貝塚の発掘のさいにえられた3例の伸葬人骨は、この貝塚において最も新しい土器を出す層との関係において発見された。これらの事実ならびに、渥美湾周辺の晩期の諸貝塚に屈葬の埋葬例とともに比較的多くの伸葬の存在す

ることからみて、少なくとも縄文時代の終り近い頃には——渥美湾周辺の地域はもとより、東北地方の若干の例をも加えて——伸葬を埋葬姿勢とする傾向があったことを指摘することができる。それにもかかわらず、ながい縄文時代をとおして、より普遍的であったと思われる葬法は、伸葬であるよりもむしろ屈葬であった。われわれの知る限りでは屈葬はそのはじめの時期からひろい意味で存続していったが、伸葬はある限られた時期と地域にしかあらわれなかつた。これは、もとより意味のあることにちがいない。だが、その意味をはっきりさせるためには、もっと具体的な豊富な資料の蓄積をまたねばならないであろう。

屈葬はひろく世界の各地にみられる葬法であるが、かつて長谷部言人博士は『蹲葬の起源に就て』<sup>(7)</sup>論じ、諸説を例挙しつつ「蹲葬は身を縮めて屍の安全を冀うに次で、見苦しからざる姿勢を附与するに出でたものであろう」と、蹲葬すなわち屈葬がなぜ行われたかについての見解を述べている。いま、その見解を正しくみとめるとしても、屈葬という行為の精神的な動機についてわれわれの学問が感性的な認識を超えるものである以上、問題の追求は別の角度から試みられねばならないであろう。

吉胡貝塚における51年度の4号人骨の埋葬状況<sup>(8)</sup>は、「地山の赤土に切込んだ埋葬穴の底面から貝層中の骨の周囲にわたって蛹をかこんだ繭のようなくわいに有機物の薄層がみとめられ」したがって「埋葬に際して何か有機物で遺骸を巻いたものではなかろうかとも考えられた」のである。一般に屈葬遺骸は、埋葬するために掘られた相応の穴のなかに窮屈な姿勢で葬られたわけであるが、その場合以上のような遺骸処理、すなわちにかでくるんだというようなことが屈葬との関連において充分問題となってくるであろう。また、かつて清野謙次博士が津雲貝塚を発掘のさい、いくつかの人骨の頭骨の位置が、胴骨と離れて奇妙な位置で発見さ



第2図 屈葬の人骨（岡山県津雲貝塚発見「京都大学文学部考古学研究報告」第5冊による）腰部の左側に鹿角製腰飾がみられる。

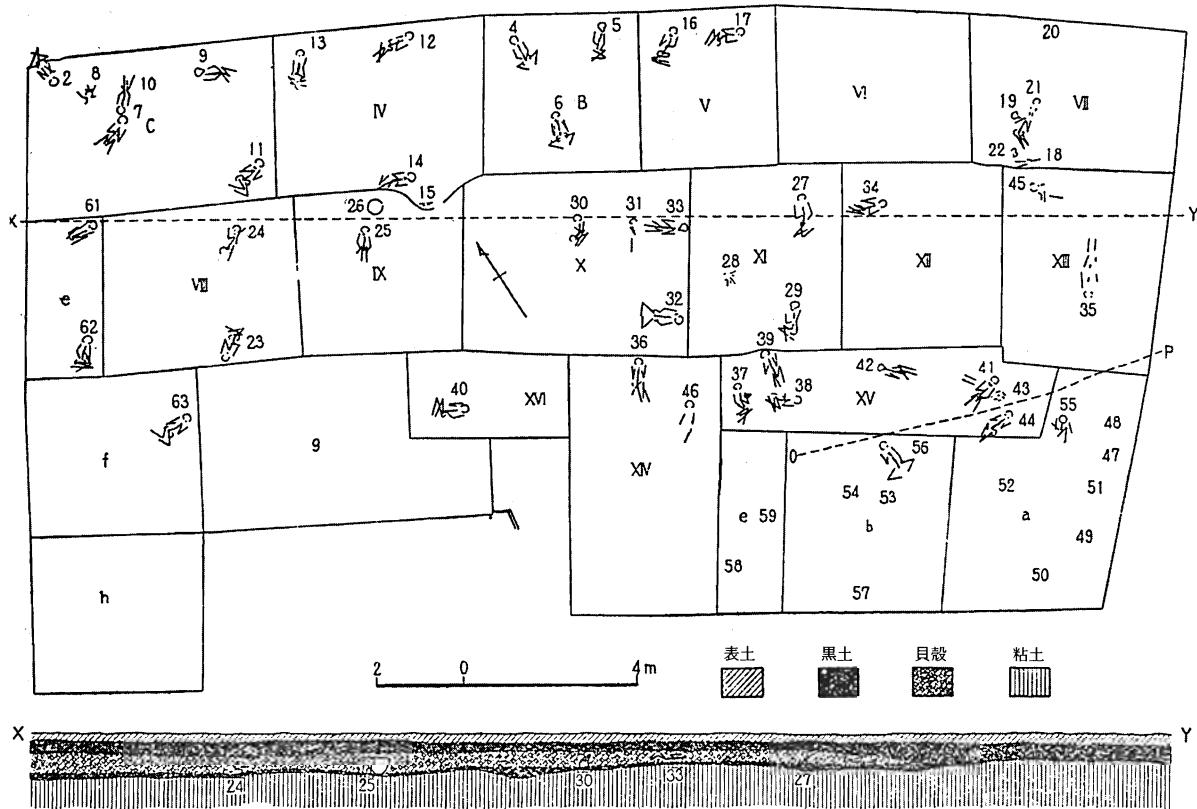


第3図 伸葬の人骨（千葉県曾谷貝塚発見 杉原莊介氏撮影）

れる場合のあることを注意し、「それは首が胴から腐れ落つる時まで遺骸の周囲に多少の空間があったと考えるより外に、理解できない」ことであるとし、「原始的な棺或は槨を造った事があったろう」と推察した<sup>(9)</sup>ことも、あらためて注意する必要があるだろう。

屈葬の理由をたずねて、よくひきあいにだされるのは、(1)埋葬穴を掘る労力の「節約」、(2)手足をちぢめて寝るのが当時の休息の姿勢であった、(3)胎児の姿勢をとらせた、(4)死者の「再起迷奔」をふせぐ、といったような考えである。しかし、以上の諸説は縄文時代に屈葬とならんで伸葬が行われ、一つの遺跡で一つの時期に二つの葬法が行われたという事実のまえでは、必ずしも充分な説明とならないように、一方伸葬の理由については屈葬と異なる説明の仕方が要求されるであろう。伸葬の遺骸を埋葬する場合には、屈葬のそれとは当然異なる埋葬穴が掘られたであろう。しかし、埋葬人骨に關係した埋葬穴の状態がまったく知られていないのは、おそらく極めて浅く掘られたものにすぎなかったからではなかろうか。そしてむしろ、埼玉県東貝塚<sup>(10)</sup>から発見されたひとつの人骨のあり方が、はっきり示すように——本来は貝層があるべきその人骨の部分のみに30~40cmの黒土が覆っていたということから——「死体の上に円く盛土して」、遺骸を葬ったとする考えを、あるいは八幡一郎・宮坂光次氏等が千葉県姥山貝塚で発掘した人骨の上には黒土が土饅頭のごとく覆っていたということなど<sup>(11)</sup>を、とくに注意すべきであると思われる。

屈葬であれ、伸葬であれ、その遺骸が意識的に埋葬された場所を、ひろい意味で墓地とよんでもさしつかえないであろう。墓地に埋葬された遺骸の数は、古い時期に少なく新しい時期に多いという相対的な傾向をもっている。早期の遺跡には、たかだか1体程度の人骨しかみることができないが、——それもごくまれな場合であるのにたいし——後期以降の墓地には、よく数10体あるいはそれ以上の多数の人骨が発見される。このことは、集落構成人員の数、その居住期間の長さ、あるいは集落占地の継起的踏襲といったような諸条件の反映の結果である。いうまでもなく、一つの遺跡=墓地から発見される何十体、何百体というおびただしい数の人骨は、いちどきにつづけざまに埋葬されたものではない。たとえば極端ではあるけれども、三百余体の人骨を出した吉胡貝塚は、数型式の土器によって示される長い期間かかって形成されたものであるが、それらの人骨もその長い期間にわたって埋葬されたものであることが明らかで



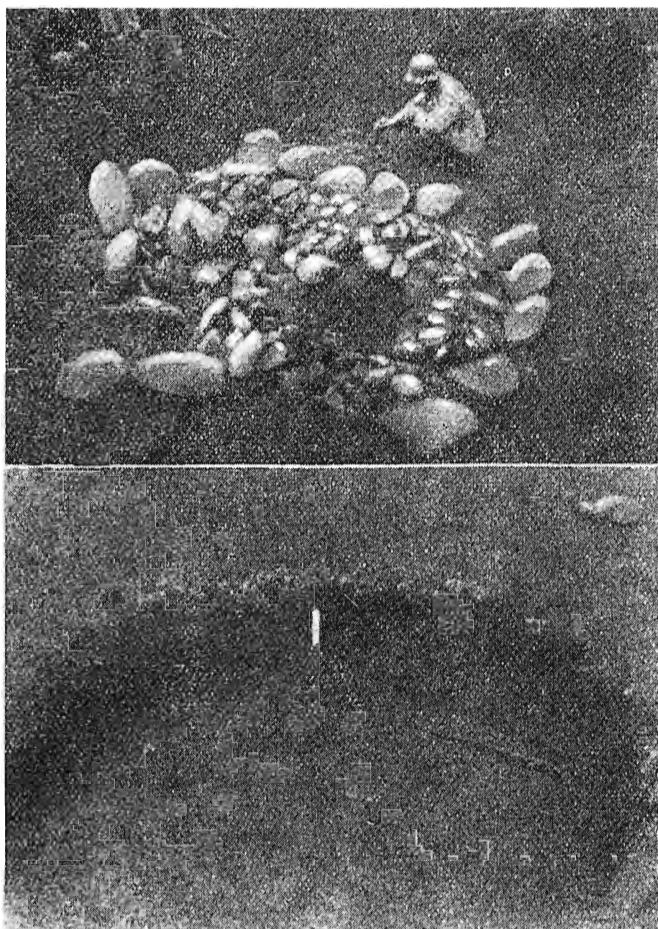
第4図 岡山県津雲貝塚発見人骨分布図(「京都大学文学部考古学研究報告」第5冊による)

ある。このように、群集して発見される埋葬例のほとんどすべては、多かれ少なかれかなりの時間的な幅をもっている。だから、以前に埋葬した場所が忘れ去られて、そこにふたたび他の遺骸が埋められることがある。この埋葬が重複した場合を重葬とよんでいるが、その特殊な一例として吉胡貝塚で発見された「人骨の盤状集積」<sup>(12)</sup>をあげることができる。それは、四肢骨を方形にならべて、その四隅や中央に頭骨・骨盤骨・脊椎骨等をつめたものであるが、これは新しい遺骸の埋葬に際して掘り出された古い人骨を雖然とではなく、規則的に配列し処理

したものであるとみられている。重葬とは反対に、2体あるいはまれに3体もの遺骸が同時に埋葬されたこともあった。この、いわゆる合葬は、男女のこともあるし、同性のこともあるった。宮城県里浜貝塚で発見された合葬例<sup>(13)</sup>は、屈葬位の老年男子と小児とがあたかも抱き合ったかのような状態にあったといわれる。合葬された遺骸=人間のあいだにおける関係は、ほぼ同時に死を迎えたということ以外深く推論する必要はないだろう。小林行雄氏は、「被葬者の血縁とは無関係に、別別に墳を掘る労力の節約ということがまず考えられてのことである」といつている<sup>(14)</sup>。

のちにふれるある種の埋葬例を除いて以外、われわれは遺骸の埋葬された地表になんらの施設も、また目じるしも見出すことができない。たとえ、木製の墓標程度のものはあったとしても、縄文時代の墓地は簡単であったから、埋葬の重複をひきおこすこともあったのだと考えられる。したがって、かかる墓地に群集して埋葬された人骨は、その頭位すなわち頭を向けた方向が西よりも東に多いという僅かの差を指摘することができても、一般的にいえばまちまちであるし、またその配置は不規則なばらばらなあり方を示している。このことについて、山内清男氏の考えをかりれば「その当時墓地は恐らく森林であり、死体は木々の間に次ぎ次ぎ埋められて行った」<sup>(15)</sup>からである。しかし、そうしたあり方のなかにも、清野謙次博士がみずから発掘にもとづいて、津雲貝塚および吉胡貝塚の人骨の一部に多少列をなす傾向のあることを指摘し、また陸前地方においては「中期以降に至れば略同一方向に向い列状をなして群集するを普通とせり」<sup>(16)</sup>といわれるよう、縄文時代の比較的新しい時期の墓地に埋葬された人骨群の一部には、合葬とは別に秩序ある配列のあったことをうかがうことができる。この配列のあり方の意味は、個々にならぶ遺骸の時期的位置を検討し、さらに墓地における他の人骨との関係において問題とされねばならないであろう。モルガンが『古代社会』のなかで、「同一氏族に属する個々人は列をなして墓地に埋葬されている」といった言葉も、こうした操作と問題追求の過程のなかで大きな示唆となるにちがいない。

1915年、青森県天狗岱において一農民によって発見された墳墓<sup>(17)</sup>は、その特殊な性質のゆえにしばしばひきあいにだされた。どうみても、成人の遺骸の入らない大きさの土器のなかに、成人の人骨が入っていたという不思議を、報告者は洗骨の習俗によって説明した。ところで、その不思議な甕——後期の縄文式土器——の上には、たくさんの河原石が積まれていたことも、また珍しいことだった。その後岩手県細浦貝塚において屈葬人骨のかたわらに、ほぼ環状をして配列された列石の存在が報告<sup>(18)</sup>され、また間もなく、静岡県蜆塚貝塚からは、屈葬人骨の上部に三百数十個を数える河原石をあたかもケールンのように積んだ墳墓が発見された<sup>(19)</sup>。縄文時代の墳墓に積石あるいは配石をもって標識とするようなものがあったことが、少なくとも以上の例によって知られていた。しかし、こうした種類の墳墓の性質がより一層明らかとなり、またそれのもつ問題が生まれてきたのは、比較的最近のことである。北海道静内町の御殿



第5図 北海道栗沢遺跡で発見された「積石墳墓」の積石とその直下の墳（河野広道「斜里町先史時代史」による）

山から5基の「小形ケーレン様積石墳墓」——報告者たちは、そうよんでいる——が発見された<sup>(20)</sup>が、それは比較的大きな礫を外周に並べ、そのなかにより小さな礫をぎっしり配したもので、大きさは直径2m40cmを最大とし、1mを最小とするものであった。この、いわゆる積石の下には、ほぼ橢円形の平面をもつピットがあり、その底にはベニガラの付着したもののや、丸石を敷いたものがあった。また、その丸石を敷いたピットからは、赤色漆塗の木櫛片や平玉が発見された。一つのピットの底に、疑いなく頭骨の一部が認められたことからみても、これらが墳墓であることはほぼ確実

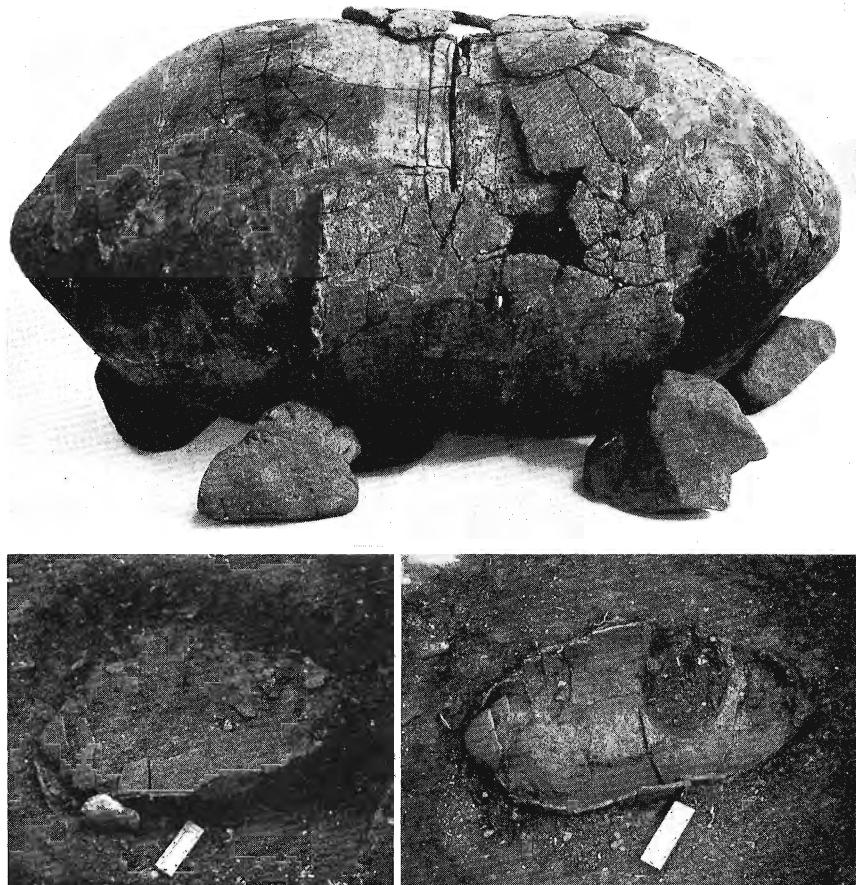
である。この墳墓のもつ年代を、報告者たちは積石付近から発見される土器の時期、すなわち後期末から晩期初頭に位置づけている。これとすべてにおいてひとしい墳墓が、同じ報告者のひとりである河野広道博士によって、斜里町朱円で調査された<sup>(21)</sup>。そこでピットからは、漆器の破片や、またそれと認めることのできるアッシの細片や、あるいは石鏃などの副葬品と考えられるものが発見された。各ピットにおける服飾品ないし副葬品のともない方のちがいは、河野氏に階級の存在を考えせしめたほどであった。今まで北海道において環状石籬あるいはストンサークルという名をもってよばれていたもののうちには、その時代と構造をそれらの墳墓とひとしくするものがあった。かつて、鳥居龍蔵博士によってツングースの墳墓であると指摘された空知郡音江の「環状列石」を調査した駒井和愛博士は、それが「石器時代の墳墓であることを明らかにし」、そして「墓の穴の大きさや、翡翠の出土状況から、想像をたくましく

してみれば西北を枕にした屈葬のもの」であると述べている<sup>(22)</sup>。さらにこれと似たものはかなり多くの場所で発見され、「殆んど全道にわたって音江の環状列石に似た大小いろいろなものが残っていることになる」といわれている。この言葉をさらに延長すれば、青森県・岩手県・秋田県などの東北地方の北半部に「案外多く」発見されるという一連のストンサークルあるいは組石遺構のなかにも、北海道のそうした墳墓と共にものがあるとみられる。

たんに——多分そういうてよいだろう——埋葬穴のなかへ遺骸を入れ、土をかけた程度の埋葬の一般的な方法に比較すれば、この北海道あるいは東北地方の一部に、とくに発達したと思われる埋葬は、それが積石ないし配石という墳墓としての標識をもっている、そのことだけからみてもずいぶんちがっている。そればかりでなく、たとえ僅かでも明らかに副葬品をともなっていることや、特殊な遺物を出すことも、きわめて特徴的である。この埋葬にあらわれたちはいは、また生活のちがいでもあったろう。

採集経済を基礎とする縄文文化が、自然環境のちがいにもかかわらず全体として質的な差異の少ないので特色とするなかにありながらも、東北日本は相当古い時期から他の地方よりも優れた文化的内容をもっていた。ことに縄文時代の後期以降には、それがいっそうわれわれの眼をひくものになっていった。その由来を結論的にいうならば、原始的な共同体の段階のなかでの生産諸力の相対的な優越性とみることができるであろう。そして、その生産諸力を保証したものは、より改良され、より多量に製作された各種の生産用具と、採集経済の生活により適応した自然的諸条件であったと思われる。東北日本の、この生産力の相対的な優越性が結果的にもたらしたものは、労働生産性のたかまりであり、やがてはひろい意味での剩余労働だった。あのわざらわしいほどに精巧と華麗をきわめた土器がつくられ、いまなお眼をみはる漆器が使われ、硬玉の玉が身を飾った、そうしたゆとりある生活をうんだ背後には、生活の基本的な生産にたずさわる以外の、なんらかの剩余労働がたくわえられていたからにはかならない。死後の世界に日常の道具をそえ、遺骸を埋めた上に遠くから運んだ石を積み、ながくとむらおうとした——なき仲間への思いやりも、結局はかれらの生活をさえた基盤の諸条件の外にでるものではなかった。

遺骸を甕——比較的大きな普通の土器——に入れて葬る風習が発達したのは、縄文時代のうちでも主として晩期の時期であった。おそらくほとんどの場合、甕は棺を目的として意識的につくられたものではなかったから、遺骸をそのまま入れようすれば、いきおい幼児・乳児・あるいはそれ以下に限られざるをえなかつたらしい。このような甕棺葬は、九州から東北地方にかけてかなりの例が発見されている。しかし、これらの甕棺は決して単一な性質のものではない。滋賀県杉沢遺跡や愛知県馬見塚遺跡、あるいは五貫森貝塚等で発見されたものは、二つの土器の口を合せて横たえたいわゆる合口甕棺であり、これが発達した時期はもっぱら晩期の終末であったと思われる。五貫森貝塚の甕棺のなかからは、小児と思われる程度の人骨と、1



第6図 合口甕棺（小林行雄他「近江坂田郡春照村杉沢遺跡」「考古学」9ノ5より）

本の磨製石斧が発見された。かつてこの合口甕棺を弥生文化に発達したものからの影響とみる考えがあったが、いまではそうした考えは成立しないし、むしろ逆に縄文文化のそれが弥生時代のあるものへ影響していったとみるべきであろう。他のほとんどの甕棺は、一つの土器からなるいわゆる单棺である。吉胡貝塚で発見された一つの例は、直立して埋った土器の口縁に接して板状の石による蓋がしてあった<sup>(23)</sup>。この蓋石の重みに土器が耐えられないものである以上、このことは土器を地表から没する深さにまで埋めて蓋したことを意味している。多くは口縁を上にして立てた位置で発見されるが、まれには横倒しの状態で埋められたものもあったらしい。

東北地方で発見されたものは、おしなべて单棺である。岩手県大洞貝塚、および宮城県沼津貝塚等で発見された10例の甕棺内の人骨を調査した長谷部博士と山内清男氏は、そのうちの9例が早産児または死産児で1例が生後まもない乳児のものであることを明らかにした<sup>(24)</sup>。清

野博士が発掘された吉胡貝塚の35例の甕棺内の小人骨は、その半数ぐらいが胎児骨であり、なかには3歳から6歳程度の幼児骨をもふくんでいたといわれる<sup>(25)</sup>。縄文時代の他の時期——中期・後期——や、あるいは東海地方に発達した縄文時代直後の甕棺の場合<sup>(26)</sup>はともかくとしても、このもっぱら晩期に盛行した甕棺のなかに小児を葬るという傾向が支配的であったことは確実である。いったい、なぜこのような風習がひろく行われたのだろうか。小金井良精博士は、『日本石器時代人の埋葬状態』のなかで「小児甕葬」にふれ、「石器時代に於ては小児を容れる位の甕はあったが、大人を容れるような大きなものを作ることは出来なかったからして、大人にはこれを頭に被せるだけで満足せねばならなかつたであろう」と述べている<sup>(27)</sup>。なるほど、小金井博士のいう「甕被葬」、すなわち成人の人骨の頭に土器をすっぽりかぶせた例が、大阪府国府遺跡、岡山県津雲貝塚、あるいは愛知県稻荷山貝塚などで発見されている。また、長谷部博士は「石器時代人が死産児を甕葬したのは、これを一個の人格として認めず母の部分と信じて居たことを思わせる」と考え、「然らば何が故に甕に入れて葬つたか。この疑問は甕そのものが説明しているように思われる。甕は容器にして、又貯蔵の目的に用いられ、即ち死産児は甕に入れて後日の為に貯蔵されたのであろう」と述べている<sup>(28)</sup>。小児の遺骸が、成人のそれとは異ったとり扱いをうけたという意味を、われわれはそうした考えの上にたって、さらに思索していく必要があるだろう。

いわゆる小児甕棺と、ある意味で似ているような性質をもつものに、甲野勇氏によってとりあげられた「容器的特徴を有する特殊土偶」がある<sup>(29)</sup>。それは中部地方と関東地方の一部で発見され、おそらく縄文時代の最終末期に位置づけられると思われるものである。この土偶のなかに、初生児または胎児の骨を入れたということは、甲野氏の説くところであり、またかかる風習は甕葬が「変化発展」して行われたというのも氏の見解である。そして、本来土偶が女性を、しかも妊娠した女性をあらわしていることが示すように、土偶と妊娠とは密接な関係をもち、またそれは妊娠と出生との関係にもつながり、したがってさらに初生児または胎児と土偶との浅からざる関係が、「幼くして死せる者の骨を入れる為に母性的性質を有す土偶型容器を製作使用した」という、甲野氏の「推定」は、この土偶のもつ意味をもっともよく指摘しているといえよう。小児の遺骸が成人のそれとは異ったとり扱いをうけたという意味は、「土偶型容器」の存在によって一つの具体的な想定を与えられるであろう。それは、母性との離れがたい関係であり、みずからの肉体から生まれながらも、生きながらえずしていのちを失つたものにたいする、母親の手をつくした処置であったということを。しかし、それにしては少しく誇張しすぎる処置であるというならば、原始共同体の段階での血縁関係が、母かたの血すじによってうけつがれていったという母系制の、間接的な反映として理解すべきであろうか。

埋葬された人骨には、「抜歯」などのような意識的に加えられた変化のほかに、ときおり外傷の痕跡のみとめられるものがある。清野博士によれば、それは今日の生活にみるよりもはるかに頻発したものであったといわれる。清野博士の生涯の労作『古代人骨の研究に基づく日本

人種論』は、「骨の外傷」<sup>(30)</sup>をとりあげ、縄文時代人にはとくに肢骨の骨折が顕著であり、わけても「最も頻発したのは前腕骨であり、殊に尺骨である」と指摘している。そして「上肢骨折の全部は右側に生じ易く、右側は左側よりも四倍多く骨折を生じ」、また「男子骨は女子骨よりも五倍多く骨折に罹って居る」という事実にふれている。このことは、かれらの生前の生活において——骨折をまねくような——はげしい労働が、多くの場合右手（上肢）によって行われ、しかもその衝撃ないし荷重が前腕部の外側に集中する性質のものであったことを意味している。そしてさらに、そこに規定される形態の労働にたずさわっていたものが、女性であるよりも男性であったという事実をはっきりと物語っている。狩猟や漁撈などのはげしい労働には、もっぱら男性が従事し、植物採集や家政は女の専門とするところであったというのは、よくだれしもが語ることである。人骨の外傷のあり方は、このことを間接的に裏づけ、縄文時代における男と女のあいだの分業、すなわち自然的分業の発達を立証している。労働が自然的分業のかたちで行われていたと思われる縄文時代には、社会的分業と交換とが発生する必然的な条件は、まだ充分用意されていなかった。したがって、私有が、階級が、生まれることはありえなかった——このテーゼを、われわれは僅かに「骨の外傷」をとおしてうかがうだけではなく、埋葬にかんする他の多くの事象からも教えられるのである。

縄文時代の埋葬された遺骸は、屈葬とか伸葬というような形式的なちがいをもちながらも、副葬品のないという点において、また埋葬施設において、すべては質的な差別をできない状態で葬られていた。東北日本の積石や配石をもつ墳墓は、その大きさのちがいや、副葬品の有無という点において、身分の相違や階級の存在を一部の人に考えさせているが、しかし漆器や硬玉やあるいは石鏃などを所有していた個人が、あるいはより大きな積石をもつ墳墓に葬られた個人が、他のいっそう基本的な生産用具と、多くの労働力を所有しうる権力者であったとは、すなわち支配する「階級」的位置にあったとは、考えられないであろう。むしろそれは、まことに述べた理由と、またそのゆえに複雑性をましたであろう共同体内部の諸関係を反映しての結果であると思う。

この東北日本の例を除けば、他のほとんどすべての遺骸には、まったくといってよいほど副葬品はともなっていない。埋葬された人骨にともなって、しばしば発見されるのは生前かれが身につけていたいたところの服飾品の類である。それは土・石・骨・角・牙および貝等の腐朽しがたい物質でつくられ、髪飾・耳飾・頸飾・腕輪・腰飾などとしての役目をもっていたと判断される諸遺物である。しかし、これらの遺物を、すなわち耳飾と髪飾とそして腰飾をともなったような人骨がある一方には、まったくなにもともなわない人骨が多くある。このことは、東北日本の積石をもつ墳墓の埋葬にみられる差と、ひとしいことではなかろうか。だが、一般的にいって服飾品の佩用は個人的な差よりも、多くの原始人がそうであるように、男女の性別による差があったかのようである。その一つの例を男に腰飾をともなうものが多く、女に腕輪（貝輪）をしたものが多いという事実のなかにみることができる。清野博士の集計した結果に

よれば<sup>(31)</sup>、腰飾は40例のうち、男28（このうち2例は疑問）、女5、不明7であり、一方腕輪は女19（このうち3例は疑問）にたいし、男3、その他性別不明のもの4、小児1、といいういづれも両性の間に著しい数的な差をあらわしている。この結果は、さらに戦後発掘された吉胡貝塚をはじめ、他の遺跡におけるいくつかの例を追加することによって、いっそう確かな事実とされる。服飾品が性別によるちがいをもつことを、この腕輪と腰飾のみからでは、充分に納得させることはできないだろう。しかし、全体的に少ない他の服飾品からでは、その差を理解させることは、いっそう困難なようである。

ところで、女性のうちでも腕輪をしていないものと、しているものとがある一方、その腕輪をしているもののうちには、片腕に1個だけしているものや、両腕に1個ずつしているもの他に、まれに左右に数個ずつしているものがある。そのような例は、岡山県津雲貝塚、同中津貝塚<sup>(32)</sup>、および愛知県吉胡貝塚で発見されている。これらはたくさんの腕輪をしているということだけではなく、津雲貝塚や中津貝塚の人骨が示すように、例の少ない耳飾をもついている。このような女性の生前の姿を考えてみると、きわめて興味のあることだろう。中津貝塚の例はよくわからないが、津雲と吉胡の場合はいずれも熟年の女性であると報告されている。たとえ、縄文時代の女性の労働が、植物採集や家政といったような比較的軽いものであったとはい、あれほどにたくさんの貝輪<sup>(33)</sup>を手にはめていては思うように仕事もできなかつたろう——とすれば、それらの女性が労働のなかで占める位置は、特殊であったと考えざるをえない。いくつもの腕輪を手につけ、耳飾を佩した女性の姿は、ひときわめだっていたことだろう。氏族共同体のなかで指導的な役割をはたしていた首長は、長い期間女性であったという所説のなかに、そのような埋葬例を考えてみることも、やがては必要な課題となるであろう。

縄文時代の社会をつらぬく基本的な諸法則——とくに生産諸関係——は、埋葬の研究をとおしてよりよく明らかにされるだろう。しかしここでは、そうした問題とその方向を提起すべく試みたにもかかわらず、きわめて素朴なかたちに終ってしまったことを遺憾に思う。それは、埋葬の研究の現状が考古学の現段階的課題にそぐわないという欠陥もさることながら、私の資料整理の不足と理論の貧困に起因していることも否めない。縄文時代における生産の総体のなかで今後埋葬の研究を進めていくことが必要であると、いまとくに感じている。

### 注

- (1) 岡本 勇「相模平坂貝塚」（『駿台史学』第3号） 鈴木 尚「相模平坂貝塚出土の人骨に就て」（『人類学雑誌』61巻3号）
- (2) 斎藤 忠「松島湾内諸島に於ける貝塚調査概報」（『東北文化研究』2—4）
- (3) 清野謙次「日本石器時代人骨の埋葬状態」（『日本民族生成論』所収、122頁以下）
- (4) 酒詰仲男「茨城県陸平貝塚」（『日本考古学年報』1）
- (5) 長山源雄「平城貝塚調査報告」（『考古学雑誌』14巻11号）

- (6) 杉原莊介「愛知県豊橋市五貫森遺跡」(『日本考古学年報』2)
- (7) 長谷部言人「蹲葬の起源に就て」(『考古学雑誌』15卷5号)
- (8) 久永春男他『吉胡貝塚』(「埋蔵文化財発掘調査報告」第1, 56頁) および久永春男「野外調査, 墳墓」(『日本考古学講座』第1卷, 77頁)
- (9) 清野謙次他『備中津雲貝塚発掘報告』(「京大文学部考古学研究報告」第5冊, 35頁以下)
- (10) 鈴木 尚「武藏新郷村東貝塚発掘調査概報」(『人類学雑誌』48卷11号)
- (11) 清野謙次博士の著書の記事(『日本民族生成論』117頁)を引用した。
- (12) 清野謙次「日本石器時代人骨の埋葬状態」(『日本民族生成論』130頁以下)
- (13) 松本彦七郎「宮古島里浜貝塚人骨の埋葬状態」(『現代之科学』7卷2号)
- (14) 小林行雄「縄文式時代の葬制」(『日本考古学概説』78頁)
- (15) 山内清男「石器時代人の寿命」(『ミネルヴァ』昭和11年3月号)
- (16) 小田島祿郎『岩手考古図集』(23頁)
- (17) 笠井新也「陸奥国発見の石器時代墳墓に就て」(『考古学雑誌』9卷2号)
- (18) 長谷部言人「陸前国細浦上ノ山貝塚の環状列石」(『人類学雑誌』34卷5号)
- (19) 柿原政職「遠江蜆塚に就いて」(『人類学雑誌』36卷4・5・6・7合併号)
- (20) 河野広道・藤原敏郎・藤本英夫『静内町先史時代遺跡調査報告』
- (21) 河野広道『斜里町先史時代史』
- (22) 駒井和愛「北海道音江の環状列石」(『考古学雑誌』41卷1号)
- (23) 久永春男他『吉胡貝塚』(「埋蔵文化財発掘調査報告」51頁)
- (24) 長谷部言人「石器時代の死産児甕葬」(『人類学雑誌』42卷8号)
- (25) 真岡亀四郎「三河国吉胡貝塚にて発掘せられたる甕棺内の小児骨」(『京都医学雑誌』3卷6号)
- (26) 久永春男「各地域の弥生式土器, 東海」(『日本考古学講座』第4卷) 参照
- (27) 小金井良精『日本石器時代人の埋葬状態』(『人類学雑誌』38卷1号)
- (28) 長谷部言人「石器時代の死産児甕葬」(『人類学雑誌』42卷8号)
- (29) 甲野 勇「容器的特徴を有する特殊土偶に就いて」(『人類学雑誌』54卷12号) および「土偶型容器に関する一, 二の考察」(『人類学雑誌』55卷1号)
- (30) 清野謙次『古代人骨の研究に基づく日本人種論』(1949年, 238頁以下)
- (31) (30) おなじ(184頁以下)
- (32) 鎌木義昌「縄文時代における埋葬施設の一例」(『石器時代』第1号)
- (33) 甲野 勇「生活用具」(『日本考古学講座』3 縄文文化) 第6図を参照
- (1956年2月 『日本考古学講座』3 縄文文化 河出書房)

\* 編集注: 初出文献の縦組みを横組みとした。再録にあたっては、漢数字の一部を算用数字に改めた。また、注(33)の表現を改めた。